令和６年度

男女共同参画に関する小学生の絵画・中学生の作文入賞作品集

主催　日立市・日立市教育委員会

― 小学生の絵画の部 ―

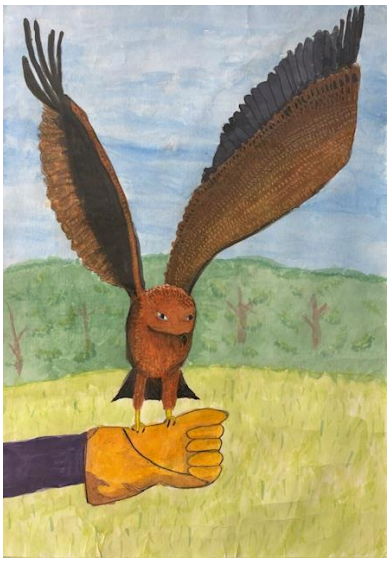
「夢をかなえた将来の私」

をテーマに絵を募集しました。
キラキラしているみんなの夢
とても素敵ですね。

最優秀賞

（油縄子小　５年　政吉　栞奈）

優秀賞

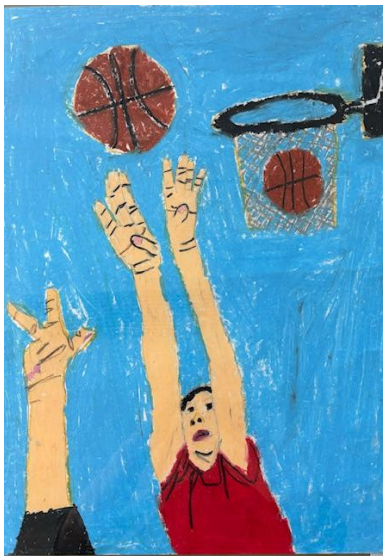


（宮田小　３年　小路　基晴）

（水木小　６年　皆川　悠人）

佳作

（助川小　２年　益子　結衣）



（宮田小　３年　高橋　咲都）

（櫛形小　３年　關　太晴）

（宮田小　４年　鹿野　夏生）

最優秀賞

我が家の男女共同参画

日高中学校　一年
後藤（ごとう）　碧月（みづき）

私の父の朝は、私と兄の水筒の準備をすることから始まります。朝食後は後片付けを済ませて、ゴミの回収日であれば、ゴミ捨てをしてから会社に出勤します。仕事から帰宅後は、母の夕飯作りを手伝い、夕飯後の食器洗いや洗濯機を回すなどして、家の中では母と同じくらい動き回っています。今や当たり前になっているこの光景も、私が小さい頃は、専業主婦だった母が家事も育児も一人でになっていたそうです。

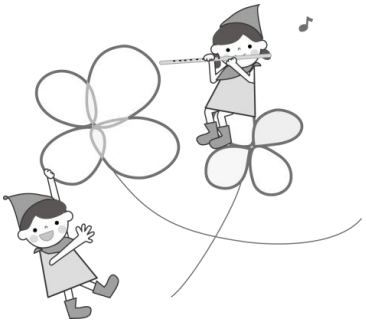
私が幼稚園生になった頃、母が仕事を始めたことで、少しずつ父に家事分担の交渉を始めたと聞きました。最初はごみ捨てから始まり、そこから風呂掃除、食器洗いなどへと徐々に父の分担を拡大していったそうです。父の家事の分担場所はどういう基準で決めたのか疑問に思ったので母に尋ねてみました。母によると、日々の小さな家事から大きな家事まで色々試してもらい、父の性格に合ったものを担当してもらっているそうです。

私は今までずっと、母は家事をすることが好きなのだと思っていました。幼稚園の頃、私の手さげをミシンで縫ってくれたことや誕生日の時に私の好きなキャラクターのケーキを手作りしてくれた思い出があるからです。母は本当は手先が不器用でミシンも手作りケーキも苦手なのだと、最近になって知りました。母も自分が「女だから」、「母だから」と無理をしていたのではないか、と私は思いました。

食器洗いや洗濯に関しては、母より父の方が丁寧だし、風呂掃除は今や兄の日課です。郵便物が届いてないかポストを確認したり、買ってきた食品を冷蔵庫に収納するのが私の役目で、飽きっぽいけれど細かい作業が好きな私に合っていると思います。家族みんながそれぞれの性格や能力を生かして協力することで家族の生活を豊かにし、家族の結びつきを強くしていると感じました。

ところで、「参画」という、普段聞き慣れない言葉の意味を辞書で調べたところ、一員として加わるという意味を持つ「参加」とは違い、「参画」には「計画に加わる」という意味が含まれていることを知りました。

「参画」の言葉の意味を知った瞬間、母のこれまでの交渉はまさに男女共同参画である、と思いました。家族の家事分担の拡大という目的を達成するため、何年もかけて試行錯誤し、性別、年齢問わず、個々の特性を生かして日々の生活を心地よく過ごせる環境づくりを母は目指したのです。この取り組みは家庭だけでなく、社会にも生かすことができると私は思います。「男だから」、「女だから」、「子供だから」関係なく、各々の個性を十分に発揮できる社会は今よりいっそう素晴らしい社会になるのではないか、と我が家の男女共同参画を通して、私は確信しています。



優秀賞

「平等」と「公平」

多賀中学校　一年
梶浦（かじうら）　柚希（ゆずき）

男女平等とよく言われますが、私は男女を完全に平等に扱うことには反対です。条件の違う人たちを同じように扱っても結果は変わらないと思うからです。それを言うならば、男女は「公平」に扱ってほしいと思います。例えば、男性と女性のスポーツ選手がマラソンで対決をするとしましょう。男女平等を目指している人は、全く同じルールでマラソンを行います。もちろん、結果は男性が勝つでしょう。一方、男女の公平を目指している人は、条件を揃えるために女性にハンデを与えます。これで、男性と女性の互角なマラソンが行われます。果たして、どちらが男女の差に配慮した試合だったといえるでしょうか。人それぞれ意見が分かれるかもしれませんが、私は後者を選びます。全員が気持ちよく試合を楽しむことができると考えたからです。

ですが、男女を平等に扱った方がよい場面もあります。保育園に通っていたとき、いつもは「ゆずきちゃん」と呼ばれていました。その日は「ゆずきくん」と先生に呼ばれました。当時の私は髪の毛が短く、男の子に間違えられても無理はありませんでした。まだそれが当たり前だった私は、とても驚いて泣いてしまったことを今でも覚えています。ですが、中学生になり、見た目だけで性別を判断することや、性別によって呼び方を変えることに違和感を持ちました。性別は物事を分類するにはとても便利な基準ですが、時には傷つけてしまうかもしれないということを忘れないようにしたいです。その経験も、男女の違いについて考えたきっかけにもなりました。

そして、物事を決める際、女子は手先が器用だから、男子は力持ちだから、と性別だけのものさしで決めてしまうことはありませんか。性別はあくまでも自分で決めたものではありません。その人の個性をしっかり見て決めることが必要だと思います。そのときは、性別にかかわらず、その人の感じ方、考え方を尊重するべきでしょう。

男女に違いがあるのは当たり前であり、仕方のないことだと思います。そのために平等が目指されています。ですが、時には公平を目指すことが必要だと思います。平等はスタートラインを揃えること、公平はゴールラインを揃えることと例えられることがあります。自分たちの力で変えていけることは平等、変えられないことは公平という考え方もあります。

そして、男女平等について深く考えることはデリケートだと考えている人もいると思います。だからといって避けていくのではなく自分の身近に潜んでいる格差、差別を無視するのではなく、自分で行動できる人が増えてほしいです。

優秀賞

男女平等と選択的夫婦別姓について

大久保中学校　一年
上村（うえむら）　恵大（けいた）

男女平等について考えてみた時、少し前に見た「選択的夫婦別姓」に関するニュースが頭に浮かんだ。同時に、母が何気なく言った言葉を思い出した。「結婚した時、職場で名字を変えなければよかった。」

母が結婚した一五年前は、結婚する際に職場で女性側が名字を変えることが大半で、変えないという選択肢が思い浮かばなかったという。変えなければよかった理由としては、独身時代に積み上げた物が、漠然とだが振り出しに戻ったような気がしたことや、名刺や職印の作り直し、メールアドレスの変更等わずらわしさがあったからのようだ。もし、自分の名字が変わったら、どうなるだろうか。昨日まで呼ばれていた呼び名が急に変わったら、慣れるまでに時間がかかるだろう。呼ぶ側だって、初めて名前を呼ぶ時は緊張するし、躊躇するはずだ。万が一、離婚しなければならなくなったら、大変だ。姓を元に戻さなければならないし、それにより知られたくない人にまで事情を知られることになる。先に述べた、煩雑な作業もやり直しだ。姓が変わった側だけが大変な思いをすることになる。

夫婦別姓を望む人が６割と過半数を超える中、はるか昔に決められた「結婚後、夫婦どちらかの姓に統一する」という法律は、昭和、平成、令和と長い年月を経て、「個」が尊重される時代になっても簡単に変わらないのが現実である。では、法律が変えられない理由はどこにあるのだろうか。「選択的夫婦別姓」のデメリットについて考えてみた。まず結婚しても姓が変わらないということは、「家族」になったという実感や一体感が生まれにくいのではないだろうか。別姓を望む人が多くいる一方で、好きな人と結婚したのだから同じ姓になって相手の家族（相手の親や兄弟、親戚）を含めて新しい家族になりたいと願う人も一定数いるだろう。また、子供が生まれた場合には、子供にどちらの姓を名乗らせるべきか悩むだろう。父や母と違う姓を名乗ることが子供にとって学校に入ってから悪影響を及ぼさないか等不安に感じることもあると思う。

「選択的夫婦別姓」は良い面、悪い面の両面を持ち合わせた一筋縄ではいかない問題のようだ。では、この先そう遠くはない将来、自分はどのようになっていてほしいだろうか。社会の一員として働く自分、家庭の中で役割を持った自分、色々な自分がそれぞれ自分らしく輝いていたい。それは男性も女性も関係ない一緒のことだ。その時、自分のアイデンティティである名前を自由に選択し、個を大切にしながら皆が輝いて生きる、そんな時代になることを願う。だからこそ、この一筋縄ではいかない問題から目を背けず考えていくことが必要だと強く思った。

佳作

言葉が作り上げるイメージ

日立第一高等学校附属中学校　一年
山下（やました）　冬馬（とうま）

「自分の配偶者を呼ぶときは、『妻』『夫』と言えるけど、第三者の配偶者を何と呼んだらいいか迷うときがある。」

母が言いました。「ご主人」「奥さん」という呼び方が一般的には多いけれど、夫婦間に上下関係があるように感じたり、夫婦間での役割が固定されているように感じたりと、差別感を感じる人も多いのではないか、と言うのです。

この話を聞いて私は、確かにそうだな、と思いました。配偶者を表す呼び方には、「ご主人」「旦那さん」「奥さん」「家内」などそういった呼び方がありますが、言葉の意味を考えると、「夫が家の主で、妻は家の奥に控えている人」というような、性別による役割をイメージさせる言葉であると感じます。

そこで私は、他の呼び方はないか考えてみました。すぐに思い浮かんだのは、「夫」と「妻」です。しかし、「夫」や「妻」という呼び方を、他者の配偶者に対して使うかと考えると、少し日本語として違和感を感じます。次に浮かんだのは、「パートナー」です。これは、相手の性別や婚姻関係によらず使うことができ、海外の人にも使いやすい呼び方だなと思いました。しかし、日常的に使うにはまだ馴染みが薄く、なんとなく目上の人には使いにくいような気がします。日本語で、と考えると、見当もつかず、思い浮かびませんでした。

たかが呼び方、一般的に使われている言葉を使っているだけで深い意味はない、細かいことを気にしすぎ、などと特に気に留めていないという人も多いかもしれません。しかし、言葉はその人の考え方や価値観、社会意識が反映されるものであると思います。その言葉に差別感を感じる人がいるという事を忘れず、言葉を選ばなければなりません。

色々と調べてみると、最近では「夫さん」「妻さん」という呼び方も増えてきているようです。差別感は感じないものの、これはこれで違和感のある呼び方ではありますが、日本人の意識が変化すれば、もしかすると当たり前のように使われる日が来るのかもしれません。

様々なジェンダー平等への取り組みが行われていますが、私達がまずできることは、小さなことだけれど、こういった差別的なイメージをほうふつとさせるような言葉に気を留め、考え、意識して使うことだと思います。

そして私は、上下関係、夫婦関係などに関わらず、日常的に使えるような、性別や間柄によって役割の固定されることのない日本語が、日常生活の中でも違和感なく普通に使えるような世の中になってほしいと思います。

佳作

みんなで世界を変える

十王中学校　二年
田中（たなか）　心結（みゆ）

なぜ性別は存在するのでしょうか。これは、私が小さい時から思っていたことです。私は女子ですが、女子の中での流行や考え方に同意できず、最近は、私服も女の子っぽいものではなく、いつもスポーティーなものです。そして、絵を描くこと、おしゃべりをすること、おしゃれをすることよりも、断然、体を動かすことが大好きです。だから、たまに両親にもっと女の子っぽい服を着たら？と言われることもありました。

そう言われるたびに、私は疑問を抱いていました。男の子に生まれていたかったなと感じ、悲しい気持ちになることもありました。そして、私の気持ちを両親に話したら、理解してくれました。特に、女子と言われて嫌な気になったり、疑問に思ったりはしないけれど、自分は自分の良さを大切に生きていこうと思いました。

私が抱いていた、疑問について調べてみました。「どうして、性別が存在するのか」それは、まだはっきりとはわかっていません。一つの説としては、「自分たちの子孫を残していくのに都合が良いから」という理由が挙げられています。

生き物は、自分たちの仲間がいつまでも続いていくように、遺伝子というものを子供に残しています。遺伝子は親の体の特徴を子供に伝える設計図のような働きをしています。親からこの設計図をもらった子供は、親と同じ生物になります。人間から全く別の遺伝子をもつ生物になることは絶対にないのです。

ところがこの遺伝子、一人の親から次の一人の子供へ、そのまま受けつがれるわけではありません。子供は、遺伝子をオスから半分、メスから半分もらうようになっています。こうしてオスとメスの遺伝子、つまり設計図をまぜ合わせることで、親とは違いろいろな特徴をもった子供ができるわけです。

パイロットになりたいという子供がいたら、多くの人は、男の子だなと思うでしょう。パティシエになりたいという子供がいたら、女の子だなと思うでしょう。社長になりたい、子育てを頑張りたいと言ったらどう思いますか。

私たちは、その考え方から変えていかないといけないのです。昔から、男女というものはあったから、今すぐ、考え方を変えるというのは、難しいかもしれません。

しかし、一人一人が、意識を変えていかないと、世界は変わりません。だから、私は、地球にともに住む、同じ人間なのだから、男女差別をせず、接し、身近な人に広めていきます。

佳作

赤でも青でも

十王中学校　二年
小池（こいけ）　結人（ゆいと）

夏休みとなり、部活動から帰ってくると、ちょうど、昼食の時間となる。両親が仕事で出かけているため兄弟三人で母が出勤前に作っておいてくれたサンドウィッチを食べようと、三枚の皿をテーブルに並べた。飲み物の用意をしていると、一番下の妹が、

「私、赤い皿ね。」

と言い、自分の食べる所に赤の皿を置いた。そして、私の所には青を、弟の所には黄緑色の皿を置いた。この食器は、赤、青、黄緑の三色セットで普段から、カレーライスや、冷やし中華などのときに使っている物だ。デザートにプリンがあり、皿にプチンとやって、おしゃれに食べようという事になった。この時に使ったのは、水色、ピンク、エメラルドグリーン、ラベンダー色、オレンジの五色セットのネズミのキャラクターの形をした小皿だ。食器棚から小皿を運び、テーブルの上に適当に重ねて置いた一番上のピンクの皿を私が選ぶと、

「お兄ちゃんは男の子。ピンクはかわいい色だから、それは私に貸して。はい、お兄ちゃんはエメラルドグリーンのお皿ね。」

といって、小皿を交換することになった。私は色に特別こだわりはなく、別にどれでも良かった。

しかし、何かが私には引っかかる。女子の色、男子の色という決まりはない。でも、小学三年生の妹のような、まだ小さな子供も「この色は、女の子」という意識があるようだ。

テレビのニュースでも、おもちゃやランドセルの色などで、自然と小さい頃から性別と色を結びつけることになっていると聞いたことがある。そして、その話を家族ですると、

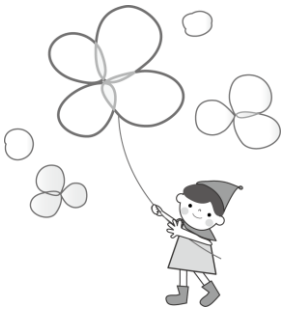
「今の学校のジャージは、どこの学校でも男女で同じものだけど、お母さんが中学生の頃は男子は紺、女子はあずき色と分けられていた学校もあったんだよ。」

と教えてくれた。

それから、「性別にとらわれない色」という意味である「ジェンダーレスカラー」という言葉があることを知った。白や黒、黄色や最近ではパステルカラーも含まれるようになったそうだ。

私は、男か女かの二択で決定するのではなく、性別にとらわれないで、自分自身が好きだったり気に入ったりした色を、自信を持って選択でき、誰もがその人が選択したことを否定することなく受け入れられるような考え方が広がると良いと考える。そのことに加えて、性別によって色を区別しないことや、ジェンダーレスということを強く言い過ぎることにより、相手に自分の考え方を強要してしまうことにつながらないように気をつける必要がある。

私は、自分の考えをもちながらも、様々な考え方を知って共生できる大人になりたい。



佳作

僕の男女共同参画

日高中学校　三年
後藤（ごとう）　夏輝（なつき）

中学校に入学するにあたって、はじめての制服を僕はとても楽しみにしていました。制服のパンフレットの中の女子の制服の選択項目にスカートだけでなく、スラックスの欄を見つけた時、僕は不思議で仕方ありませんでした。通学途中、スラックスをはいている女子の先輩や女子高生を見かけた時も同じように、まず最初になぜスカートではないのだろう、と考える自分がいました。

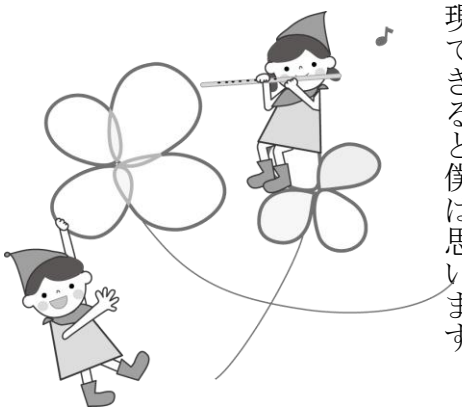
家の中で、お腹が空いた時、とれたボタンを縫い直して欲しい時、体調を崩した時、父がいたとしても、まずはじめに僕は母に声をかけます。「お父さんに言ってもいいんだよ。」と笑いながら答える母に、どうしてそんな事を言うのか戸惑うことがありました。

しかし、母が体調を崩した時、父に母の代わりに食器洗いや洗濯の手伝いを頼まれた時、なぜ妹ではなく、僕がやらなくてはいけないのだろう、と反発する気持ちを自覚してはじめて母の言ってた言葉の意味が理解できました。僕自身が、「母だから」、「女だから」と母だけに役割を押し付け、「女だから」スカートを履くものだと決めつけていたのです。この決めつけが、自分自身の考え方や行動を制限することにつながり、可能性を狭めていることに気がつきました。

女子のサッカー選手を見て、「女子なのにすごい。」と感じ、男性のモデルがメイクをしスカートをはいてランウェイを歩いていると「男なのに、なぜスカートなのだろう。」と驚いてしまうこと自体、僕自身が「男だから」、「女だから」と差別して、その人自身の能力や魅力を正確に見ようとしていなかったのです。

僕は、外で体を動かして遊ぶことより静かなところで本を読んだり絵を描く時間が好きです。逆に僕の妹は、釣りや戦闘ゲームが好きで、じっくり本を読んだり、ひとりで過ごすことが苦手です。自分が好きなこと、得意なことを「男なのに」という理由だけで、理解してもらえないこと、苦手なことを「男のくせに」と否定されるのはとても悲しいことだと思います。男女関係なく、それぞれの個性や能力を認め合い、尊重しあうことは、相手を理解する上で大切なことです。ありのままの自分を認めてもらえることは自信につながり、より、自分の能力を発揮できるのではないかと僕は思います。

まずは、僕自身にある「男だから」、「女だから」という考え方から変えていかなければなりません。一人一人の考え方を変えていくことが、社会全体の意識を変える一歩につながると思います。性別だけで能力や可能性を決めつけることなく、お互いを理解し、尊重していくことができれば、自分たちの能力を十分に発揮できる心地よい豊かな社会が実現できると僕は思います。



発行　日立市生活環境部女性若者支援課　男女共同参画推進室

〒　317－0073　日立市幸町 1-21-1

ＴＥＬ:0294（26）0315

日立市男女共同参画社会
シンボルマーク